

2009 年度科学研究費補助金間接経費による研究活動活性化事業

若者の生きづらさと自立・労働を考える

— 元引きこもりの若者たちとの関わりから —

Discussing Living Difficulty, Independence, and Labor of Young People: A Report in Relations with Those Who Had Been in *Hikikomori*

梶原 公子

ここに掲載するのは、2010年3月7日に本学で開催された講演会「若者の生きづらさと自立・労働を考える」の記録である。本講演は、科学研究費補助金間接経費による札幌学院大学研究活動活性化事業「若者の生きづらさと自己実現系ワーカホリックに関する労働社会学的研究」の一環であり、井上芳保、湯本誠、石井和平、高田洋の四人による共同申請企画として実施された。当日は、この後に「ベーシック・インカムを再考する」という同じく科学研究費補助金間接経費による、本講演会と関連するテーマのシンポジウム（記録は作成中）が控えていたこともあり、市民の方々をはじめ、学内外から多くの方がつめかけ、盛況となった。

講師の梶原公子さんは、いわゆる「引きこもり」になって学校からドロップアウトした若者たちへの教育実践を行う「ニュースタート」で講師をしておられるが、そこでの教育の様子を中心に話して下さった。品性など普通の子が学校に適應することで失ってしまうものをかえて「引きこもり」の若者は有しているのではという話題、「ニュースタート」では食べることを大切にしているがそこに栄養学的知見は敢えて入れないようにしているという話題など、認識を新たにすることが多々紹介されていて、たいへん貴重な記録となっている。（文責 井上芳保）

1. はじめに

皆さんこんにちは。今日はとりあえず、1時間のつもりで話をさせていただきたいと思います。タイトルは『若者の生きづらさと自立・労働を考える — 元引きこもりの若者たちとの関わりから —』です。

先程、井上さんの方から『自己実現シンドローム』（長崎出版）という本の紹介をしてい

ただきました。20代の若者を対象にして、書いた本なのですが、私は20年余り、高校で教員をやっていたこともあり、高校生、それから20代くらいの若い人に対して関心があります。私は80年代と90年代に教員をやっていたのですが、80年代の初めというのは“荒れる学校”というのがありまして、私の勤務する学校ではなかったのですが、近隣の教員に聞くと、トイレの戸を外されたとか、便器を壊されたとか、“荒れる学校”というのが

あったとのことですが、80年代前半です。

それが80年代後半になると、今度は「管理する学校」「管理される生徒」になっていきました。「荒れる学校」は沈静化していき、一見落ち着いていったかのように思えたのです。90年代になると、今度は、これは一部だと思うのですが、私の勤務していた学校では授業を受けないというか、授業を拒否するというか、学校の教育から離脱する生徒が出始めました。反対に進学校では学校とか教育に対する過剰反応や過熱した受験指導が出てきました。この中で、80年代、90年代を通して高校生とか若者が明らかに変わってきたと思っていました。

20年間、そういう若者たちの変化を見てきました。そして去年からなのですが、今度は「ニュースタート」という、引きこもっていたのち、世の中に出てきた若者を支援する、そういうNPOに関わるようになりました。今日はそこでのお話をしたいと思います。

2. 「ニュー・スタート」について

配布した、リーフレットの裏に書いたのですが、それでも、実は私は、引きこもりについてそれまで全くの不勉強というか、そういう人と接したことがなかったのです。去年の4月の時点までは、単なる怠け者とかやる気がない人とか、脱落者とか、そう見ていたのです。なので、ここで授業するという時に一体何をどのようにしたらいいのかが皆目分からなかったのです。でも、そういった若者に非常に関心がある、非常に惹かれるものがあったので、この授業を始めました。

その前にちょっと、「ニュースタート」という所についてお話した方がいいかと思えます。一言で言うと、引きこもりやニートの若者の再出発の支援をするNPOです。北海道の浦河にある「べてるの家」とすごく似ていると思えました。「べてるの家」には「ニュースタート」で教え始めてから後に2009年9月

に行ったのですが、そのときにそう思いました。

何が似ているかという、まず【資料1】に「ニュースタート事務局のこれまで」という年表のようなものをごらんください。その右下の方に地図があります。「ニュースタート」はどこにあるのかという、日本橋という東京の中心地から地下鉄で20分ほど行った行徳という駅、ここは千葉県浦安市に入りますが、その駅を降りて10分くらい歩いたところにあります。そこの黒く塗りつぶした所が「ニュースタート」の関連施設で、事務所を中心にして点在しています。例えば「キッズベーカリー」というパン屋さんがあるし、普段料理の店「マンマ」は食堂です。それから喫茶店「縁側」というのがあります。「べてるの家」に行った時もやはりこんな感じでした。「べてるの家」が運営している喫茶店が町内に存在していました。

その中心になっているのが「行徳センター」でここが事務局「福祉コンビニ」というのをやっていて、事務所内は、デイケアの施設も兼ねているのです。この施設の周辺に「ニュースタート」に入ってきた若い人達が暮らす寮が幾つか点在しています。私はこの寮というのは行ったことがないのですが、「あしたば寮」とか「妙典寮」とか色々な名前があります。「べてるの家」に行った時もこういう寮のような所で生活していると聞いていたので、その点も似ていると思います。それからもう一つ似ていると思ったのは、その地域に根をおろしながら活動を展開している点です。だから行徳という地域と繋がりながら、活動を展開しています。

ただ違うのは、「べてるの家」は精神的に病んだ人が来ているようですが、「ニュースタート」は15歳から35歳位までの若い人で、元引きこもりの人達が来ている点です。後で女性についても触れたいと思いますが、ほとんどが男性です。私に関わっている人では、女

【資料1】

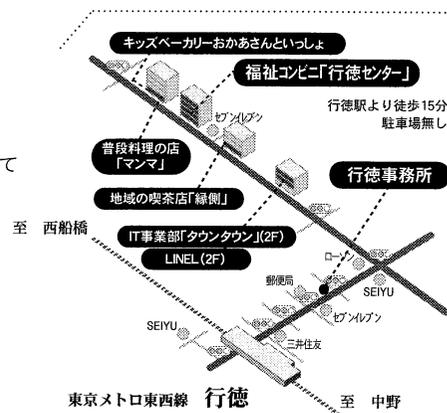
ニュースタート事務局のこれまで

- | | | |
|-------|--------------|---|
| 1993年 | 6月 | NHKテレビ「イタリアふれあいの旅 愛の4家族」で、二神がプリケッラ農園の4軒長屋の活動を知る |
| | 11月 | 二神夫婦、プリケッラ農園の宮川御夫妻を訪問 |
| | 3月 | 二神の「フレアイ村構想」との接点として、ニュースタート・プロジェクト（NSP）が浮上 |
| 1994年 | 9/12
～1/2 | メルロ博士、バルバラ女史の指導のもと、第1回NSP実施。16才～22才の男4名、女3名がプリケッラ農園で生活。以降1999年までの合計8回実施 |
| 1995年 | 4月 | NSPが「国際交流基金」の助成事業となる |
| 1996年 | 3月 | 帰国後の若者のケアの問題が浮上し、日本側の体制強化のため、サポーター養成講座がスタート |
| | 4月 | 経団連の支援が決定。日本の企業の在り方が若者問題の原因のひとつであると訴える |
| | 9月 | サポーター体制が発足し、計9回の親の会を実施。NSPが「家族プロジェクト」であることを確認 |
| | 11月 | 国際シンポジウム「家族をひらく」開催 以降1999年まで合計5回開催 |
| 1999年 | 3月 | 若者サポーターの活躍が目立ち始める。若者が若者を応援しその若者たちを大人が支援する形が確立 |
| | 11月 | 若者の再出発を応援する団体として「NPO法人」に認証される |
| 2000年 | 3月 | 第1回ホームヘルパー2級養成講座を開催 |
| | 11月 | 市川市行徳地区に「福祉コンビニ」オープン。若者の「スローなやさしさ」が好評 |
| 2001年 | 4月 | 行徳第2MRオープン。家族単位の受入れを開始し、「家族をひらく」を実践 |
| | 7月 | 「なんでもお手伝い屋」オープン |
| | 8月 | 地域の喫茶店「緑側」オープン。仕事体験塾の多様化が進む |
| | 10月 | IT事業部「タウンタウン」増設オープン |
| 2002年 | 1月 | 普段料理「マンマ」オープン。「ゆるやかな大家族」の色彩が強まってくる |
| | 3月 | 妙典MRオープン。プロジェクトが環境関連、音楽・スポーツ関連など多方面に拡大 |
| | 8月 | マニラMRオープン。世界に88か所の「農業、教育、福祉」の拠点づくり |
| 2003年 | 5月 | ローマMRオープン |
| | 9/6～11/6 | 第1回 四国お遍路 Slow Walk Shikoku 88 開催 以降春と秋に年2回開催 |
| 2004年 | 3月 | 「雑居福祉村 船橋」オープン |
| | 4月 | 明日葉MRオープン 不登校の小中高生を対象にした『子どもの居場所』オープン |
| | 6月 | 訪問スタッフ養成講座第一期開催 10月に第二期を開催 |
| | 7/30～8/5 | カンボジアNGO活動に5名が参加 |
| | 8月 | 30代無職の出口講演会開催 |
| | 8/13 | 「子育て長屋船橋」NPO法人認証 |
| | 10月 | 「ニート」meets「引きこもり」シンポジウム開催 |
| | 12月 | 大学不登校を考える会シンポジウム「こんなにある！大学以外の道」開催 |
| 2005年 | 1月 | 第1回「雑居福祉村をつくろう」全国集会開催 |
| | 2月 | 2/10「ニートの日」ニート祭り開催 |
| | | 新潟中越地方の地震災害復興ボランティアに参加 |
| | 5月 | 甲府雑居福祉村ユースホステルオープン |
| | 6月 | シンポジウム「希望のニート」を東京・神奈川・千葉・埼玉・大阪で開催 |
| | 9月 | 第2回「雑居福祉村をつくろう」全国集会開催 |
| 2006年 | 3月 | キッズベーカーリーおかあさんといっしょオープン |
| | 4月 | 技能連携校LINEL（ライネル）開校
株式会社スローワーク設立 |
| 2007年 | 1/27 2/3 | NHK土曜ドラマ「スロースタート」放映 |
| | 9月 | 9/3 百年遍路スタート（～2107年9月3日） |
| 2008年 | 5月 | 厚生労働省委託事業
「いちかわ若者サポートステーション」開設 |
| | 7月 | 地域若者サポートステーションのモデル事業として
レンタルお姉さんによるアウトリーチを開始 |

発行：NPO法人ニュースタート事務局

発行人：二神能基
 発行所：〒279-0011 千葉県浦安市美浜1-3-1006
 電話：047-307-3676
 F A X：047-307-3687
 E-mail：newstart@mua.biglobe.ne.jp
 URL：http://www.new-start-jp.org

2008/07/20 作成



性で引きこもりだったという人は一人だけで、なぜかは後で出てきます。

それから、海外にも拠点を持っています。これは代表の二神能基さんのポリシーです。

最初はイタリアから発想を得て、この“ニュースタート”を作ったと聞きました。イタリアとかフィリピンのマニラなどに幾つかサテライトみたいな所を持っていて、そこから外国の人達がボランティアとして“ニュースタート”に来て交流するというシステムになっています。

もう一つ特徴的なのは、“レンタルお兄さん”、“レンタルお姉さん”、という人達が引きこもりの若者にアプローチして引き出すという役目を担っていることです。レジュメの1ページに、「家族を開く訪問活動“レンタルお兄さん”“レンタルお姉さん”」とありますが、これが「全国どこでも訪問サポートします」というシステムで、テレビでも紹介されました。それから漫画本にもなりました。『レンタルお姉さん物語』（扶桑社）です。名前は知られているようです。そもそも“レンタルお姉さん”の役目は、「目標を見失って行き詰った若者を社会につなぐ役として、就職活動をリードする」というものです。

3. 「レンタルお姉さん」になる場合の二つのパターン

これは“ニュースタート”で使っている資料ですが、「“レンタルお兄さん”“レンタルお姉さん”とは」と書いてあって、メンバーの写真が出ています。この人達はどんな風にして若者と接触していくのかというと、最初は大概、親から“ニュースタート”に電話連絡で依頼がありまして、それを受けて依頼した親と面談して、親が「サポートしてほしい」と申し込みます。すると“レンタルお姉さん”のうちの誰かがその子の係になるという手順です。

その後の活動のことを“レンタル活動”と

呼んでいるのですが、“レンタル活動”は最初は手紙とか電話とかで本人に直接コンタクトをとって、その後、その子の家とか、その近所の出先で会って色々な話をします。そして一緒に外出したり、遊園地などに行ったりなどして、いろんな体験をその子にさせます。そして、最後は“ニュースタート”の寮に入ってくるという、その辺までやるのが一連の“レンタル活動”なのです。

私が授業で関わっているある若者、A君という子なのですが、そのA君の場合を聞くと、小学校4年生の10歳くらいから引きこもり、20歳まで10年間引きこもっていたということです。その担当になった“レンタルお姉さん”が知り合いなのですが、彼女に聞いたら、最初、その子に電話とか手紙でアプローチして行って、そして、その子の家に一番近いバス停まで「来て」とアプローチしたそうです。その子はバス停まで出てきたのだけれども、最初バジャマ姿でバス停まで来たと言っていました。その後、何回か接触し、その子の家が小田急線の厚木にあったので、「『厚木駅』まで出てきて」と言い、次は町田という、もうちょっと都心寄りの駅まで、次は新宿までという具合に段々伸ばして行って、最後は行徳まで一人で来てもらったそうです。最終的にはその子は入寮するのですが、そのようなやり方をして、大体半年から1年、長いと1年半くらいかかるそうです。

でも必ずしも出てくるとは限らない、ということでした。“レンタルお兄さん”“レンタルお姉さん”たちと接し、話を聞いているうちに、彼女、彼らがこの仕事に至るプロセスには二つのパターンがある、と私は思いました。一つのパターンは今の社会に一度は就職するのだけれど、その労働現場とか、労働観とかが自分の描いていたものとかかなりの落差があって、それに疑いを持ち、その会社を一度辞め、色々探しているうちに“レンタルお兄さん”“レンタルお姉さん”に行き当

たったというパターンです。もう一つは元自分自身が引きこもりだったパターンです。元引きこもりだった人が“ニュースタート”に来て、今度は、自分自身が“レンタル活動”をする側に回るというパターンは、いわばピアカウンセラーです。

レンタルお姉さんたちに聞いてみました。「どちらのパターンの方がより活動としてやりやすいのか」と。はじめはピアカウンセラーなのかと思っていたのですが、そうではなくて、最初のパターン、つまり「一度就職したのにそれをやめて“レンタル活動”をやっている人」の方が上手くいくそうです。つまり「ピアな関係じゃないほうがいい」と言うのです。何故かという、「この“レンタルお姉さん”というのは、要するに『社会の中でいなくなっちゃったお節介々な人』という役目をしていて、親とは違う目線で話しかけるからです。それがピアな関係になるとどうしても同情的になって、相手の引きこもっている若者の心理状態と同じになっちゃうので上手くいかないんだ」ということでした。

私は何人かの“レンタルお姉さん”とこれまで接してきています。一人の方は23~24歳まで印刷会社に勤めていて、その間「自分探し」をしていたそうです。この印刷会社では自分はどうも役立ち感が感じられないと感じて“レンタルお姉さん”になったという人でした。この人は「お給料はすごく安いんだけど、役立ち感があって、とても精神的に満たされている」と話していました。“レンタルお姉さん”のOGという人がいますが、この人は、結局は“レンタルお姉さん”を卒業して、“ニュースタート”のスタッフになっていて、ここに来た元引きこもりの若者と結婚しています。男の子が一人生まれていて、“ニュースタート”に来ている若者に見てもらいながら彼と子育てをしています。二人で何とか一人前のくらしができると言っていました。

もう一人、ちょうど30歳で“レンタルお姉さん”をやっている人がいます。この人は小中高とずっと女子中、女子高、女子大で、ホテルに就職してそこで4年働いたのですけれども、やっぱり役立ち感が感じられなくて、“ニュースタート”に来たのですが、丸3年になるそうです。彼女は「ここだとちゃんと人と向かい合っていると感じる」と言っています。また「引きこもりの若者というのは利害、打算、ずるい、そういう面がないから、自分も精神的にすごく救われる」、「非常にやりがいがある」と言っていました。勿論、この「役立ち感」については、そのことを重視することの問題もあるように感じますが、後でちょっと触れたいと思います。

4. 完全な“自立”はこれからの若者には望めない

それから、4番目です。この“ニュースタート”というのは二神さんが立ちあげたNPOなのですが、この方はいくつか面白いことを言っているのでも、それを書き出してみました。それはまさに“ニュースタート”のコンセプトでもあるのですが、「“自立”は50%でいい」という言い方をしているのですね。さきほど元レンタルお姉さんのように二人で一人前で元引きこもりの若者と結婚するのでいい、と言っているんですね。「完全な“自立”はこれからの若者には望めないんだ」。そう言っています。

それから、「“パラサイトシングル”というのはずっと言われてきたことだけでも、これからは“パラサイトダブル”なんだ。結婚して、二人で一人前になれなかったら、二人で親元に寄生しながら生活してもいいんじゃないか」とも言っています。でも、「これを言うと若者は引いちゃって評判が悪い」そうです。「自立よりもまず幸せが大事なんだ。今の若い人は結婚する時に自分が自立してないと結婚してはいけないんじゃないか」と思っているみ

たいなんだけれども、そんなことをしていたら、いつまで経っても結婚できないから、そんなことよりもまず「幸せ」と考えた方がいいんだ」ということが二神さんのポリシーです。

括弧して『怠ける権利』と書いてあるんですが、これは彼の言葉というよりも、ポール・ラファルグの書いた本のタイトルです。どういふことかと言いますと、これは二神さんの話でして、私はあまり深いことはわからないんですけど、ケインズという経済学者がいます。ケインズの経済理論によると、ケインズが生きていた頃に、その後の未来を予測して、このままずっと機械化、分業化が進んでいくと、今の生産を維持するとして、労働を3分の1か4分の1に削減できるということです。ところが、その後高度に産業が発達したのにこの予測とは反対に、若者はかえって過密労働で、長時間労働になってしまい、ケインズの予測は全く外れているというのですよね。

結局、一部の若い人の中にニートでもいいからあまり働きたくないという人達が出てきているのですが、それは当たり前だということです。元々、そんなに働かなくてもいいのに、働かなきゃいけないような状況になっているから、もう自主的に怠けるという若者が出て当たり前だ、というのが趣旨なのだそうです。それで、昨年11月23日の勤労感謝の日には、皆で怠ける権利ということで、勤労は感謝しないというようなアピールをしたと言っていました。そういう考え方が「ニュースタート」を運営していく上での一つの骨格になっているのではと思います。

それから、ここでの「引きこもり」の定義ですが、「半年以上、親以外の人とコミュニケーションをとっていない人のことを指す」ということです。

話が前後してしましますが、さっきの資料の1に書いてある、「レンタルお兄さん」、

「レンタルお姉さん」の右側に、若衆宿とあるのですが、寮に入っている人達のことを若者と呼びます。幾つか寮があるんですが、その寮のことを若衆宿と呼んでいます。ステップを踏んでいってこの寮から卒業していくというのが通常のプロセスです。

その寮というのは、行徳に点在するアパートを一つ借り上げたものです。若者は一人一人個室なのだけれども、パソコンとかテレビは個室に持ち込んではいけない、というルールがあって、パソコンとかテレビは共同のリビングで見るそうです。朝食はその寮で摂り、昼食と夕食は、「ニュースタート」が運営する食堂で摂ることになっています。「ニュースタート」の食堂は『マンマ』という名前が付いているのですが、若者が順番にシフトに入って、自分達の昼と夕食を作るというシステムになっています。

5. 「食を大事にしていきたい」という基本方針と「鍋会」の実施

それから、次の2ページ裏の「ステージ3」と書かれた所に「働きと学びの場」と書いてありますが、その下の『学びの場』に「ニュースタート高等学院 LINEL」とあります。ここが私が関わっている所です。広域通信制高校の技能連携校と書いてありますが、拠点となる大きな高校（星槎国際高校）で、通信教育で国語とか数学の単位を取って、その他の選択みたいな単位として、「ニュースタート高等学院 LINEL」で、幾つかの単位を取るというシステムになっています。

要するに「ニュースタート高等学院 LINEL」に来ている若者というのは小学校、中学校、高校のどこかで挫折して、学校に行かなくなった為に高校卒業資格がないので、それを取りたいという子の為の学びの場です。このLINELはLiving Needs for Lifeの略ですが、生きるための学びとか、そういうコンセプトで学校を運営しています。ここで

やっている科目は美術と英会話と生活科、それから仕事体験などで。

私が担当しているのは生活科という科目です。最初、家庭科でやってくれと頼まれたのですが、ちょっと名前を改めて生活科にしています。生活科というのは去年から始めた授業ですが、授業するにあたって今年のスタートの時に私は、二つの方針というか柱を立てました。一つは「食」です。「ここは自分たちでお昼と夕食を作っているくらい食べることを大事にしているんです」と言われたので、授業の半分が「食」に関する内容というか、全面的に料理作りです。つまり調理実習をずっとやります。それが授業の半分です。あとの半分は「生きるための学び」というコンセプトに基づいて、一番最初は住むこと、暮らすことというテーマで、ネットカフェ難民とかホームレスについて説明します。そのあと「家族論」とか、二人っ子政策に何故なったのかとか、「障害者論」「高齢福祉論」とかそういうテーマを設定してその問題に沿って、適切な、いいと思うようなテキストを選んで、そのテキストに沿って勉強してディスカッションしていくというようにしています。

「食を大事にしていきたいというニューススタートの方針から」として二つ書いてあります。一つは「献立に沿った実習はしない」、それから「栄養は考えない」。これがわかりにくい所なのですが、料理を作る時に、今日夕食を作ろうという時に必ず献立というのを立てますよね？でも、献立形式の調理はしないことにしました。栄養っていうのも普通考えますよね？その栄養も全く無視することにしました。

では何故、この二つを出したかと言いますと、「ニューススタート」に来ている若者は大概は学校で挫折して、それで「ニューススタート」に来ることになったので、学校的なことをやると意味がない、それはダメだと思ったので

す。私は家庭科の教員だったのですが、家庭科とはどういう授業を行ってきたかを客観的に思い返すことにしました。「食」の時に必ず家庭科が一番最初に栄養と言うのです。タンパク質という栄養がある食品は何か、ということを教えて、この食品をとるように献立はどうやって立てたらいいか、その献立に沿って調理実習をやる。だから、栄養、食品、献立、調理というのが、家庭科の「食」の組み立て方なんですよ。この通りにやっていく学校的になってしまう、だからやめようと思って、それで、献立と栄養はまったく無視するようにしました。

次に「鍋会」と書いてあるのですが、水曜日の夜に6時半から、たぶん夜中まで「ニューススタート」のステーションで「鍋会」というのをやるのですね。これはまあ、鍋を皆で囲んで喋る、という趣旨なのです。別に鍋だけじゃなくてもよくて、なんでも、その日に食べて欲しい物をそこに出すのです。それもシフトで「鍋会」担当者が作って、そして、大体入れ替わり立ち替わり40~50人くらいは来るのではないかと思います。その「鍋会」の場で皆で食べてもらいたいような物を生活科で作る、それをやって欲しいと言われたので、そういう調理実習をしています。

では、どんな風なものを作るかという、例えば、この2月3日が節分だったので、太巻き寿司を作りました。「恵方巻き」と言って、今年の運がいい方向を見ながら太巻き寿司を丸かじりすると、非常に「福」が来ると言われているので「恵方巻き」を50本延々と巻いて「鍋会」に出しました。それからつい最近ですが、時々レンタル活動をしている合間にこの「ニューススタート」に入寮しそうな若者が何人か来るので、その人達も巻き込んだ調理実習をしてほしいと、そういうニーズがあったので、その時は5種類の粉でパウンドケーキを作るというのをやりました。普通、パウンドケーキは小麦粉で作るのだけれど

も、片栗粉とか、米の粉とか、蕎麦粉とか、きなことか、色々な粉を使って、後でそれを切り分けて何の粉で作っているか、食感を自分の感覚で当てるといようなことをしています。

もう一つの、いわゆる座学っぽいものは三つの方針を立てています。教員はテキストを読んだりディスカッションをしたりした後、ついでアクションペーパーとか書いてもらいたくなるんですが、そういうものは一切書いてもらわない、レポートも書いてもらわない、テストはしない、評価はしない、という方針を立てました。要するに「やりっぱなし」ということです。ただ、見っぱなしというか、読みっぱなしということですか。

6. 学校的な知識がなくても「正しい考え方」や「適切な判断」はできる

さて、今日の本題ですが、そのような元引きこもりの若者と接してきた中で、実は、思わずアッと言いたくなるような、私自身がすごく感動するというか、ビックリするようなことが幾つかあったので、それをここでは6点ほどお話ししたいと思います。

まず1つ目です。これは5月位に気がついたので、"ニュースタート"に来る子には、小学校から来なくなった子がいます。私自身、長く教員をやっていたので、どうしても知識というものは大事だという考えがこびりついていたのです。特に、学校的な知識というのが基礎になって、その後の社会生活をやっていく上で非常に重要なのだ、だから、学校的な知識というのは獲得しなければならないものなのだ、という非常に強い思い込みがありました。それがなかったら、その後の「正しい考え方」とか、「適切な判断」というのができないのではと思い込んでいました。だから教育というのは知識獲得という意味があるのだと、そう思っていたのです。ところが、もしかしたら学校的な知識というか学校教育の

知識などなくたって、社会に出ていく時に「正しい考え方」とか、「適切な判断」というのはできるのではないかと、ふと、思ったのですね。

要するに、両者は繋がっていない。なぜそう思ったかという、一つは、お正月早々すぐに授業をやるのは少々きついと思ひ、最初DVDを見たのです。2年前に封切りになった、『ヒットラーの贋札』という映画です。ナチス・ドイツがポンドとかドルとか偽札を作って、米国とか英国の経済を攪乱しようと、そういう作戦を立てた史実に基づいて、それをテーマにした映画です。実は、これを見る前に『2・26』という映画も見ました。これは「青年の挫折」というコンセプトで見ました。生活科に来ている若者というのは全員男でして女性は1人もいないのですが、『2・26』は、非常に関心を持って見てくれました。

ところが、よくよく聞いてみると、日本がいつ戦争をしたとか、勿論、2・26事件など知らないのです。『ヒットラーの贋札』の時も「日本もナチスドイツとはちょっと関わっている」とか、「三国同盟を結んでいたのよ」と言ってもまったくちんぷんかんぷんな様子でした。「それはそうだよ」と思ったのです。だって、小学校から学校に来ていないのだから仕方ないのです。それでは家で何をしてきたかという、ゲームばかりやったり、自分の好きな絵を描いたり、フィギュアを集めたりとか、そういうことばかりやっていたので、まったく、所謂学校の勉強をやっていないのです。ところが、『ヒットラーの贋札』を見た後で、一人ずつコメントを言ってもらったら、ファシズムという言葉こそ出てこないんですけれども、非常に的確な、ナチスドイツと日本、イギリスとの関係を非常に的確に捉えたコメントが出てきたのです。

そういうことがありましたが、もう一つ、私が授業をやっている一番最初に感じたのはカウンセリングのことです。5月くらいの時

です。彼らは学校から離脱しそうになるときカウンセリングを何回も受けさせられるというのです。いろんなパターンで受けている。一人でカウンセラーとやったこともあるし、両親と三人の形もあるし、母親と二人という形もある。それらが非常に嫌だった、不快だったと言っていたのです。それで5月くらいに「こころ主義」と心理学の系譜についての大きな話をしました。例えば、「心の専門家」が出て来たとか、「心のケア」がしきりと言われるようになったとか、80年代に学校の中で予算がついて、「心の教育」が始まったとか、或いはその後、「心の闇」という言葉が出てきたとか、その後で「愛国心」だとか「道徳心」だとか、そういう系譜がずっとあるという話をしました。

ただそういう話をして「気になった言葉とコメントを言って下さい」と聞いたのです。ある21歳の若者なのですけれども、彼は10年位引きこもっていたのですが、彼が一番気になった言葉は「愛国心」だと言うのです。なぜそれが一番気になったのかと聞いたら、「日本に生まれてよかったとか、日本人で良かったとか、そういう気持ちというのは教育で生まれるものじゃないから、教育で“愛国心”を植え付けるのは変だ」と言ったのですよね。

もう一人は中学から学校から離脱した子です。この子は「心の教育」というのが気になったと言いました。彼も「心というのは教育するものじゃない」と言いました。そして、一連の系譜の話はずっと聞いて「すごく政治的なものを感じた。政治的なコントロールが働いているんだと思う」とも言いました。この子も高校で勉強していません。

このようなことに幾つか会おううちに、学校的な知識があるから論理的思考ができるとか、知的判断力がでるといことでは必ずしもないのではないかと思うようになりました。それで、かえってというか、反対に、学

校教育を受けることによって失われてしまうものもあるんじゃないかと思いました。つまり、学校というのは、学校的な知識とか学校的な考え方というのは、一つの教育学という中で組み立てられているから、同じような一つの考え方とか判断の仕方とか、基準というものがある、そこに流されていくようになる。それに乗って、いろんなことを考えるようにどうしてもなってしまうのではないかということです。何回かそういう場面に出会って、そう思うようになりました。

反対に、彼らが小学校の時から学校教育を拒否して受けなくなった、ということで、得られるもの、損失しないでも済むものがあると思います。つまり、学校教育を受けないことというのは、学校的な知識とか考え方というのに乗らない訳だから、その人が本来持っている独自性とか、本来の良さというのがそのまま残るということです。これはメリットです。そういうことを強く感じました。これが真っ先に感じたことです。

7. 品性が高いとはどのようなことか

2番目。「品性が高いとはどのようなことか」と書きました。二神さんのコメントにはなかなか鋭い、すごいなあと思う指摘が幾つかあるのですが、例えば、こういうことを言っています。「“ニュースタート”の若者は物欲が低い、競争心が低い、そして、品性が高い」。確かに物欲は低いし、競争心が低いから学校から離脱していく訳だと思うのですが、品性が高いというのは確かにそうだと思うのです。でも一体何を基準に、どういう事を指して品性が高いというのかが、いまいち私には具体的に理解できなかったのです。

ところで、『ニュースタート通信』というのが出ていますが、この中の1ページに毎回『若衆宿日記』というのが載るのです。この中に、私の知っている若者が何人かいるから必ず読むのです。左側の村上寮というのは、住んで

いる寮の名です。本名で書く子もいるし、ペンネームで書く子もいるのですが、上から三つ目の「明日葉 MR マンマ」って書いてあるのを読んだ時に、私、こういう事かと思ったのです。O君のを、ちょっと読んでみます。「マンマ」というのはさっきも言ったように食堂の名前です。昼と夜、ここで40~50人の食事が作れるような施設設備です。厨房と食堂があります。そこにシフトに入って、昼と夜の食事を作ります。

「ニュースタートに来てから、週に一度『マンマ』のシフトに入って料理することになりましたが、それまでは、料理を作ってもらう事はあっても、自分でつくことは考えてもいなかったの、初めのうちは材料の切り方や、火加減などわからないことが多くて戸惑いました。また、『マンマ』に来る大勢の人数分の調理をしなくてはならないので、2品献立をつくらうとすると、時間の配分が難しく思うように作業が進まず、料理をする前にはよく手順を考えておかないとだめだということが分かったりもしました。」

献立は自分で考えて、自分で材料買って、自分で作るんです。だから、一人が30人分とか40人分、一つの、例えば鳥の唐揚げを作りたいと思ったらその分を作る、そうなっています。

「今は、『マンマ』で料理をするようになってから、だいふ経つので、1度作った料理ならなんとか時間内に作ることができるようになり、料理を作ることにもだいふ慣れてきましたが、作るだけで精一杯で、出来上がった料理の味のほうには、あまり自信がありません。他のシフトのメンバーは、皆、料理の上手い人ばかりなので、たまには、これを出してしまってもいいのかなと思うこともあります。料理が出来上がったあとは、達成感より不安の方が大きかったりもするので、『マンマ』を閉める前の後片付けで、シンクを磨い

ているときに幸せだと感じます。」

私はこれを読んで、最後の「シンクを磨いているときに幸せだ」という箇所に品性を感じました。料理というのは、作った人は誰でも普通は、ハイライトを出来上がって、盛り付けたものを誰かに食べてもらって「おいしい」って言われた時だと感じますよね。その瞬間が一番、作った人冥利に尽きると感じると思うのですよね。ところが、このO君という若者が幸せを感じたのはそこではない。大量炊事をやりますから、後片付けをして全部食器も洗わなければならない。シンクも大きいのがあって、最後に消毒なんかもしたりして、綺麗に片付けるんです。「シンクを磨いているときに一番幸せ」という感覚、それをなんて言ったらいいか、一言で言うなら「謙虚さ」かなと私は思いました。

そう思っている時に、私が授業で担当している28歳のY君という子がいるのですが、彼のことを二神代表が「これまで自分が会ってきた男の中で、というか人間の中で一番、謙虚な顔をしている」と、その子を前に言ったのですよね。結局、品性が高いというのは、やっぱりこの謙虚さというのとすごく重なることが多いんじゃないかな、と思います。

私自身、考えてみると、教員を辞めて9年になるのですが、仕事をしていた時というのは、やっぱり、給料を貰う、そして、給料が高ければ高いほど、自分に関係なく有能感というのが、どうしても出てきてしまうのですよね。バリバリ仕事をしていて、その給料をたくさんとればとるほど、この有能感——自分はすごく能力があるんだ——という考えに囚われちゃって、どうも謙虚さがなくなる、と思いました。つまり、物欲も競争心も出てきちゃって、品性がなくなる、ということです。「ニュースタート」の若者を見ていてそういうことを非常に感じました。

8. 耐える力あるいは「引きこもり力」について

それから、3番目です。「耐える力あるいは「引きこもり力」について」とありますが、最近つくづく「引きこもる」ってどういうことなんだろう？と、考えます。私自身、体調が悪くて二日三日家の中にいるということはありませんが、一週間、家の中から一步も出ないということは、ちょっと耐えられないと思います。しかも、学校で勉強しないとか、塾も行かないとか、友達とも遊ばないし、部活動もやらないし、家の中でじっとしている。つまり、何もしないということなのだと思えます。多少はしてると思うのですが、所謂、普通の若者がやるようなことは何もしていない。でも何もしないということは無意味なのだろうか。どういうことなのだろうかということを考えて、10年間引きこもっているなんてすごい事なのではないかと、そう思いました。

そう考えている時に、これは年明けすぐの出来事なのですが、さっきも言った星槎国際高校という、通信制で単位を取ることでできる所があります。そこに年に何回かスクーリングに行くのです。そこで年明けに星槎オリンピックというのがあったそうです。いろんな部門、芸術部門とか、文芸部門とかがあって、それが終わったばかりの時に、授業に行きました。するとある若者が、「先生、これ見て」って言って、「K君が油絵で入賞!!」と書いてあるのを見せるのです。これは『ニュースタート通信』に出ていたのをコピーしたものです。彼は「こいつが」とK君を指して、油絵を描いて、星槎オリンピックで入賞して、その絵が一万円で売れたというのです。このネクタイした絵です【資料2】。

その時に『ニュースタート通信』が手元になかったので彼はホワイトボードにマジックでこの絵とそっくりなのを描いてくれたのですよね。こういう絵を描いたっていうのです。K君に「この絵のタイトルはなんていう

【資料2】K君の絵『人ではない人』



の？」って聞いたら、『「人ではない人』』と言ったんですね。私、このK君の絵を見て、実は非常にびっくりしました。なぜかと言うと、『人ではない人』っていうこの絵は、K君の内面というか、自分の内面を自分で見ているのではないかと思ったからです。

K君は10年引きこもっていて、20歳になって出て来たのですが、要するに、それまで社会とかいろいろな人を全部拒絶して生きてきたわけです。学校も拒絶して、友達も拒絶して、自分だけの世界に閉じこもって生きてきたのだけれども、閉じこもっている間、自分で自分というのが何だか分からない、それでそれがすごく不安であるということはあるでしょう。孤独であることに耐えているというのもあると思います。絵には顔が全然ないのですが、その中で耐えている、そういう孤独感のようなものを感じました。無為に過ごしている、何もしないで過ごしている、そういう状態に非常に焦りを感じて、そのことにも耐えている。非常に逆説的な感じがするのですが、何もしないでいることが、本当はいかに彼にとってたいへんで、反対にいかに大切なことだったのか、そういう感じもしました。

10代を全部、学校に行かなかった訳です。

他の10代の子が学校生活をエンジョイして、そして成績を上げたり、いろいろなことを勉強したりしている間、それを全部拒絶しているというのはどういうことなのかというと、やっぱり、全然違う価値観がそこに働いているという気がしたんですよね。反対の負のエネルギーと言っていいのかわからないのですが、外側に向けて、外に出ていくエネルギーというのをプラスのエネルギーと言ったら、内側に向かっていく負のエネルギーというのも相当なものではないかと思いました。ただ、そういう負のエネルギーで籠っているのが結局、無為で、空白な時間と普通は、そうとられます。私もそうとっていたのですが、この絵を見て、実は、なんかすごく別の意味で、負の意味での精神的な豊かさとか、そういうのがなければこの絵は描けないのではないかと感じて、非常に驚きました。

9. 自分を否定しつつ肯定する、肯定しながら否定することの意味

それから4番目。「自己否定と自己肯定」と書きましたが、これも、実は若者と接してすぐに感じたことです。「レンタルお姉さん」から聞いたところ、「レンタル中の子はダメなんだけれども、「ニュースタート」まで来て入寮した子はもう、どんな事を聞いても大丈夫」と言われたので、かなりの事を聞いているのですが、そうすると、ほとんどの子が引きこもっている間に「死にたい」と何回も思ったとか、自殺を考えたと言います。そして「自分は弱者ですから」とか、そういった自分を否定的に見る、非常に卑下する言葉をすごく言います。

5月になってから入寮してきた、この人も21歳の若者なんですけど、彼に何かのきっかけで話したら「僕はそもそも人間に生れてきたことが間違いだと思っているんですよ」。そう言うのですよね。それで「人間以外ならどんなものでもよかったと思っています」とこう

言うので、「じゃあ、どんな生物に生れてきてくればよかったと思っているの?」と聞いたら、「ゴキブリ」と言うんです。「ゴキブリって人間に叩き潰されるから嫌じゃないの?」と聞いたら、「ゴキブリも人間もいない所で暮らすゴキブリだっていっぱいいるんだから、そういう所で暮らせばいい」と言いました。

確かに最近、若者の中で「人間以外に生れてきたかった」という話を聞くことがあります。テレビで相撲取りの山本山が「自分には蚊に生まれたい」とか言っていました。なぜなら、「体重が重すぎるから、軽い動物なら何でもいい」と言うのです。そのことを思い出したのですが、そういう非常に強い自己否定感を持った若者が多いのです。

それから、4月の初めに「住むこと暮らすこと」という授業で、ホームレスを観察するというフィールドワークをやったのですが、隅田川と上野公園に行き、2、3時間ほど歩いてホームレスがどんな風に暮らしているかを見たとです。その後でコメントしてもらったら、大概の子が「自分もああいうホームレスになるかもしれない」、「この先、ちゃんとした仕事に就ける訳ではないから、ホームレスが自分の姿と重なった」と言うのですよね。

でも「自分はこのままではダメになってしまう」、そして、その一方で「なんとか就職して、仕事もして、一人前になって自立して、結婚して、子供も持たなければいけないと思う」と言います。一方では、今の社会規範を絶対的なものと思って、それに沿っていない自分はだめだと思って、卑下する自分がいるのですが、もう一方で、そうじゃなくって、その同じ若者が「本当は自分は誰かに自分のことを知って欲しい、でも、他人に何とかしてもらおうじゃなくって、自分で自分の事は何とかしたい」。そういうプライドもあるのです。

ホームレスについても、「見に行くまでは、もっと自分の意思でホームレスになったと

思っていた。もっとちゃんとしていると思っていたのだけれども、昼間から寝ていたりして、あれでは生きる屍だ、まったく生命観が感じられない」と、ホームレスを批判するんです。さらに「本当にお金の心配がないんだったら、今の労働価値観に従った生き方はしたくない」というようなことも言っていました。今の労働とか、学校に対して猛烈に批判をするのですが、「そういうのに自分を合わせるんじゃないかって、その労働価値観というのを変えていきたいんだ」というようなことも本音として出てきます。「今の学校というのは大人の敷いたレールを間違いなく歩く、それが健全だというように、自分はずっとやられてきたのだけれども、自分はそれがすごく嫌だった」ということも言います。否定してその後で反対に攻勢に出ることがあります。

要するに自分を否定しつつ肯定する、というか、肯定しながら否定する、ということです。これも私は「そうだよ」と思うようになりました。学校にいてどうしても、最近では自己肯定感ということを教えますから、そして、自己肯定感とは精神的な自立につながると、学校的なコンセプトで言うとそうやってきます。だが、本当にそれがいいのかとむしろ我々は問わねばならないのではないかな。やっぱり、自己否定と自己肯定、自分を卑下しながら、自分でプライドも保つというのが普通なのではないかな、と私は思います。だから、両方を揺れているのは当然ではという感じがします。結局強い自己否定だけでもダメだし、強い自己肯定だけでもやっぱりダメなのでは、と思うのです。本当に自信を持って引きこもっているという訳じゃないのは当然です。それから、自己否定の中にはさっき話題にした一種の謙虚さみたいなものも滲み出ているのではないかな、ということも感じます。

10. 「役立ち感」が常にいいものとは限らない

それから、5番目に書いた「役立ち感」ということについてです。これは若者というよりも、「レンタルお兄さん」「レンタルお姉さん」について、私がちょっと思ったことですが、「ニュースタート」の一つのコンセプトとして、「仲間」「働き」「役立ち」というキーワードがあるのです。「レンタルお姉さん」というのも、先ほど冒頭で紹介したように、普通の労働現場では「役立ち感」が感じられないのだけれども、「ニュースタート」に来て、そのスタッフになって、役立ち感を感じてそれが精神的な支えになっているということなんです。そういうことを盛んに言っていました。確かに役立ち感というのは大事なことだと思います。これも、多分、賛否両論があって、私もちょっと、そこまではっきり言っているのかわからない部分もあるのですが、この「役立ち感」というのは社会とか人の役に立つことによって、自分が認められるという一つの欲求です。基本的な欲求の一つだと思うのです。

でも、本当に役立ち感というのは、生きていく上で必要なのかなと「レンタルお姉さん」を見ていて感じるがあります。何故かと言うと、結局、裏返していくと、役立つことをしなければいけないとか、何か意味のあることをしなければ、意味のある仕事じゃなければいけないということに繋がりがかねないからです。私は、高校の現場に長いこといって、授業案を立てることにどういう意味があるのかとか、授業の狙いは何かとか、どういう意味があるからその授業をするとか、意味のあることで埋め尽くしたようなしたような空間にいました。その中から評価をしていくわけですが、本当は高校生とか若い人達はそれに辟易してるんじゃないかな、と感じることがあります。

今の若者たちの心情として、役立たなければならぬという気持ちもあるけど、そんな

意味のあることで埋め尽くされていくようなのも非常に息苦しいという気持ちも同時にある。これらの両方を、教員をやっていた最後の頃にすごく感じました。もし、この役立ち感が大事だということになると、この役立ち感というのは自己実現と繋がると思うんです。或いは、「自分探し」とか、「自分目当て」とかいうことを非常によく言われていますけれども、そうすると、「役立たなくなった自分はダメ」、「意味のあることをしない自分はダメ」と、裏返すとそういう風になってしまいます。ですから、「役立ち感」でやっていくと、それが燃え尽きた時に自分そのものがダメになってしまう、そういう危うさがあるんじゃないかな、と思います。

役立ち感に囚われながら仕事をしていくのは実はすごくきつい事です。本当はお金があれば働きたくない、ということをお願いしている若者が、「ニュースタート」に限らず、ちらほら出ています。ここら辺のことをうすうす感じ始めている若者が出ているのではないかなと思います。結局、お金があれば働きたくない、という気持ちをもっと出してくれば、こういう全体にきつくなっている社会というのがちょっと緩むという効果もあるのではないかなとも思います。

11. 人生の第二、第三、第四ピリオドは「無」「無」「死」の意味

「引きこもりの若者」を、私はまだ1年程しか見ていないのですが、「あっ、こういう人種がいたんだ」と、今まで学校の中だけで見て来た若者と全然違う面があるという感慨がありました。これもつい最近の話なのですが、「家族論」をテーマに授業をしました。テキストの中にかつては50年、60年だった人生が、80年、90年になったから、人生のタイムスケジュールというか、人生スケジュールがかつてと較べて変わってきた、そういう一節が出て来たのですね。それでその授業の中でこれ

からは80年、90年という人生になるから、例えば、20年刻みで人生を区切って行って、生まれてから20歳まで、20歳から40歳まで、40歳から60歳まで、60歳から死ぬまで、と四つのピリオドに区切ってみましょうということをお話しました。

この四つに名前をつけるとして第一ピリオドから第四ピリオドでもいいし、交響曲のように、第一楽章から第四楽章までとしてもいいのだけれども、自分で一つ一つの20年ずつのスパンで見えていった時に「その区切りに名前をつけて下さい」という課題を出したのです。0歳から20歳までは、みんな21歳以上の人でしたから、そこはもう終わっちゃったので問わないとして、「第二ピリオドから第三、第四ピリオドまで名前をつけて下さい」ということにしました。

それで、つけてもらった名前を順番に言ってもらったら、ある若者が、彼はさっきの絵を描いたK君だったんですけども、「第二ピリオド、20歳から40歳になるまでの20年間の名前は“無”だ」と言うのです。「40歳から60歳は？」と聞くと、これも「“無”」って言ったのです。「60歳から後は？」って聞いたら「“死”」だって言うんですね。じゃあ「“無” “無” “死” なの？」って聞いたら「そうだ」って言うんですね。「“無”って言うことは何もない事なの？」と聞いたら「何もない」と言うんですよ。

私はこれを聞いて、ちょっとびっくりしまして、雑談している時に二神代表に「実はK君はこんなことを言っていたのだけれど」と話したのです。ちょうどそこに「レンタルお姉さん」もいて、彼女は「実は今、あるレンタル中の21歳の若者が『この一週間で必ず首吊り自殺してやる』と言っているのです。だから今、レンタル活動を中止しています」と言ってきました。それに対して二神代表は、「もしかしたら、このレンタル活動は“お姉さん”じゃなくて、K君に行ってもらった方が

いいんじゃない？」と言ったのです。

何故かと言うと、多分「死にたい」と言った若者に対して、我々が持っている持ち札は限られています。つまり「命は大事なんだよ」という、そういうサイドからのアドバイスしか、結構、持ち札がないと思うのです。ところが「K君みたいな若者が『無、無、死』という禅問答みたいなことを言い出したら、その首吊り自殺したいと言っていた子はやめちゃうんじゃないか」と二神さんは言ったのです。

私たちの生命観とか人生観、「命は大事」とか「人生は一度しかない」とか、そういうものは教育によって作られた、非常に加熱してきた価値観ですよ。あるいは「人権が大事」とか「自由が大事」とか「努力しなきゃ」、「発達しなきゃ」とかもそうなのですが、そういう一つの物差しとは違うようなものが、引きこもっている人達の中にどこかあるのではと思うのです。ベクトルの向け方が違うんじゃないかと思いました。

「人権」とか「自由」とか「向上」とかそういうコンセプトでずっと近代社会はやってきたわけだから、学校が行き詰っている時に、こういう、全然違うコンセプトを出すことによって、まったく違う光を投げかけていけるのではないかなと、それを聞いていて思いました。今の学校にはそういう違うベクトルがないので学校が非常にきつくなっていて、居にくくなっている、そういうことがあるように思いました。

12. 引きこもりの女が問題にならないことも実は問題

最後にもう一つ。何故、ニート、引きこもりの中に女性が非常に少ないかという問題です。「ニュースタート」に来ている9割以上の人が男性なのです。女性は一人だけ関わっています。20代前半の女性なのですけど

も、この人と話をしていたら、こういうことがわかったのです。結局、引きこもりで男の人というのは、一定の年齢になると、必ず外に出て働きに行かなきゃならない、仕事をするのが当たり前。だから、仕事をしないでぶらぶらしている男の人は変だっという見方があるから、反対から言うと、引きこもっている男の人の方がレンタル活動やそういうターゲットになりやすい。変だから、じゃあ、その人にアプローチして、「ニュースタート」に来てもらう。こういう風になるから、結果的に若い男の人の方が「ニュースタート」にたくさん来る。ところが、女の人というのは、日本の場合「主婦」というカテゴリーの生き方があり、若い女性はその「主婦」予備軍です。私が高校の教員だった時に、どこにも就職先がなくて、そういう女子生徒で「カジテツ」——家事手伝いのことですね——になるという子がいました。

10代で家にも『私カジテツだから』と言えば立派なカテゴリーに属するからいいんです。だから、結局、本当は引きこもりなのだけれども、家にもお母さんの家事見習いみたいなことをしているのだから、引きこもりのように見えない。潜在的にはそうなのだけれども、結局はターゲットの対象にならないという、そういう問題があるのですよ。だから、本当は引きこもりの男女比は半々なのだそうです。そういう意味では女性の方が大変なんです。

一応、1時間ということでしたので、以上でとりあえずの報告は終わりたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

(本原稿の元になるテープ起こし作業は、社会情報学部4年生で井上ゼミ所属の吉田健人君によってなされた。記して労をねぎらいたい。井上芳保)